

「農家の部」 全国農業協同組合中央会長賞
岡田 義久 氏 (愛媛県西条市)

1. 経営者及び経営内容

岡田氏は県下でも有数の穀倉地帯であり、日本一のはだか麦産地である西条市で、夫婦2人で主食用米、飼料用米、WCS用稲等の水稻(7.3ha)のほか、はだか麦(3.8ha)、大豆(0.9ha)の米麦大豆作を組み合わせ、水稻を含めたローテーション栽培を行うことで麦の連作を避けるとともに、水田有効活用に向けて取り組んでいる。

現在はJA周桑農機利用者会推進委員副会長を務めており、人望も厚く、地域農業振興に貢献する人材となっており、地域農業の中核農家及びリーダーとして活躍している。

2. 技術上の特色

栽培は基本技術の励行を徹底することを基本とし、ほ場状態に応じた計画的・効率的な作業を意識している。そのため、適期を逃すことなく適切な作業を行うことができ、収量・品質の高位安定化を実現している。

(1) 湿害対策

はだか麦は麦類の中でも特に湿害に弱く、排水対策が極めて重要であるとの認識の下、ほ場ごとの排水性や土質を見極めながら、ほ場状態に応じた対応を行っている。

排水対策は弾丸暗きよの設置を主体とし、全ほ場に行っている。また、明きよについては、地域の標準的な機種より大きい管理機を利用し、指針の目標としている15cmになるように作業を行っている。さらに栽培期間中も適宜修繕を行い、高い排水性の維持に努めている。

(2) 土づくり及び肥培管理

枯れ熟れ対策としてカリウム補給を行うため、前作の稲わらは焼却している。また、はだか麦は酸性土壌では生育が悪いため、JAや県の協力による土壌pH測定、前年の生育状況等を踏まえ、苦土石灰による酸度矯正、鶏糞堆肥等による地力維持等、積極的に土づくりを進めている。

中間追肥は硫安を用い、また、各機関の情報やほ場巡回を踏まえて生育診断を行い、ほ場毎に施肥量を調整し、省力化とコスト低減に努めている。

(3) 播種

定期的に種子更新を行い優良種子の播種を心掛け、コストを抑えながら健全生育を両立させている。

毎年、ドリルシーダー等の使用機材の保守点検を実施し、故障等による作業遅れを避けるとともに、播種の高精度化、発芽の均一化を図っている。

品質確保のため早播は避け適期播種に努めており、仮に降雨等により播種が遅れる場合は、播種量を増量し出芽数の確保を図っている。

(4) 土入れ・麦踏み

麦の生育状況とほ場の乾湿具合を見極めながら、土入れ・麦踏みとともに2回実施し、湿害防止、除草、発根・茎数確保、根上がりによる乾燥防止等を徹底することにより株づくりに繋げている。

(5) 雑草及び病害虫防除

雑草防除はJA栽培指針を基本とし、ほ場間の雑草の発生状況に応じた除草剤の種類・散布回数の調整を行っている。出穂期以降に発生するカラスノエンドウは、品質低下防止のため除草剤散布と併せて収穫前に手作業で除去している。

赤かび病については地域全体の課題として取り組んでおり、愛媛県東予地方局の孢子飛散状況調査、県病害虫防除所の情報、ほ場での発生状況等を確認しながら、JA指導員と協議し適期防除に努めている。

(6) 適期収穫

出穂期以降は常にほ場を巡回し、ほ場ごとの成熟具合と天候を把握するほか、県が示す積算温度からの収穫適期予測、JA・県主催の立毛調査結果等を参考にしながら、細心の注意を払って適期収穫に努めている。

3. 収量の向上、品質改善

マンネンボシについては、鶏糞堆肥等による土づくりの徹底、中間追肥による施肥量の確保により、単収は506.6kg/10aであり、愛媛県H29年産(261kg/10a)を大幅に上回った(県対前年比194%)。また、徹底した排水対策、中間作業(土入れ・麦踏み)、積極追肥、適期防除・収穫により、1等比率90.8%(愛媛県29年度平均1等比率88.9%)と良好であった。

一方、今年度から導入した新品種のハルヒメボシは、単収・1等比率ともに県平均をわずかに下回った。ハルヒメボシについては実需者ニーズが非常に高い品種であり、愛媛県内ではマンネンボシからの全面切り替えに向けて、種子の確保及び最適な栽培管理の模索を行っているところであり、岡田氏も今年度、試験的にハルヒメボシを生産していた。施肥量等はマンネンボシと同様の管理としたが品種の特性に合わず単収は伸び悩んだ。今年度の結果も踏まえ、施肥量・タイミング等の改善を図り、高単収実現を目指していく。

4. 労働時間の軽減

周桑地区では古くから基盤整備がなされたほ場が多いなか、岡田氏のほ場は未整備の部分が多く、1筆20a程度の不整形ほ場が主である。また、ほ場毎に土質、排水性も様々であり、ほ場状態に応じた管理が必要である。その中で、10a当たりの所要労働時間は6.3時間と愛媛県平均の8.0時間を大幅に下回っている。

労働時間軽減に向け、農地間の距離は概ね100m以内となるよう集積を行い移動時間等の軽減や必要に応じた大型機械のレンタル等により省力化を図っている。さらに、丁寧なほ場観察、これまで培った経験等を元にした高い計画性により、最大限の作業の効率化を目指している。

5. 流通の改善、合理化

作業の効率化、品質低下防止、コスト低減(乾燥・選別施設)等のメリットが多いことから乾燥・調製はJAのCEを利用している。自前の乾燥機を使わないことで、乾燥機の容量を気にせず収穫作業を行うことができ、収穫適期を逃さない作業にも役立っている。

6. 今後の麦作への取り組み

排水対策及び土づくりをベースとした基本技術の励行、ほ場間の移動が少ない農地集積、レンタル農機具の有効活用等を継続し、省力化と生産コストの低減を図りつつ、単収・品質の高位安定化を図っていく。

1. その他特記事項

県内産はだか麦の約8割が麦みそに加工されるが、硝子率が低く、白度が高い新奨励品種のハルヒメボシは、実需者のニーズが非常に高い品種である。課題である単収についても、栽培試験等からは施肥量やタイミング等の改善で多収が期待できることから、地域に合った栽培方法を早期に確立するとともに、品種転換を進めていく。